社会保障研究の広い視野

――Sullerot 氏との出会いの中で得たこと――

松　村　祥　子

1982年，国立婦人会館での講演のために来日されたシュルロ氏と初めて出会ってから，早や13年が経った。

シュルロ氏は1924年生まれのアルザシエンヌで，両親と共にレジスタンスにも参加した経歴の持ち主である。プロテスタント牧師であり，精神科医でもあった父君がどんなに改革的医療を実践していたかということや，ドイツとの闘いの最中に路上で倒れ亡き人となった母君は中世からの慈善史の研究にとても熱心だったという話を聞いた。また，弟さんはパリで有名な難関校エコールアルザシエンヌの校長を永年勤めた人である。

1977年春から1980年秋にかけての3年半の間，ストラスブール大学で地域の社会保障の歴史研究に従事していた私とはアルザスの取り持つご縁もあり，すぐに意気投合した。その後はパリに行くたびにお会いし，そのうちの数回はシュルロ家に数週間寄宿したりする機会も得て，実に多くの語らいをし，また惜しげない研究上の援助（関係者の紹介や資料収集など）を受けた。なかでも印象的だったことは，氏が創立し全国組織をもつ女性の再就職センターでの研修や，氏がメンバーである社会経済審議会の討論への参加，そしてフランスの社会保障の父といわれるピエール・ラロック氏との会談等である。本や資料で読むのと違い，社会保障に関わる実務家，政治家，研究者を身近に感じることができたことは幸いであった。

わが国ではシュルロ氏は，女性論の作家，実践家として知られている。1966年に邦訳された「未来の女性」（根本長兵衛訳，朝日新聞社刊）や1972年の「変革期の女性」（水田珠枝訳，平凡社刊），また1983年の「女性とは何か」上下巻（E. シュルロ・O. チボー編，西川祐子他訳，人文書院刊）が，広く読まれているからである。また，横浜フォーラムでは，シュルロ方式の再就職研修プログラムを導入して成果をあげている。

しかし，シュルロ氏の主張は社会保障と大いに関係がある家族政策の促進にあることも，もっと知られて良いことだと思う。邦訳はないが，1984年に出版されフランスアカデミー賞をとった―Pour le meilleure et sans le pire―（Fayard,「最悪を避け

て，最善にむかって」—仮訳—）や1986年の—L'âge de travailler—（Fayard,「働く年齢」—仮訳—）は大変興味深い本である。特に，前者では，社会保障と家族の相互関係が詳細に分析されていて示唆的である。

1960年から1980年頃までに女性の就労を促し，多子家族の経済負担を軽減し，出生率の低下を底支えするのに効果を発揮した家族手当が，1980年後半以降問い直されている中でシュルロ氏はどんな動きをしているのだろうかという興味で一昨年（1993年秋）再会した。「私たちは今，新しい家族法典の提案の準備をしています。それは，税制上の改革，産育休暇の充実，家族手当の建て直し，住宅政策の強化が主たる内容となっています。」「特に職業生活と家庭生活を両立するために男女双方を対象とする改善を雇用，休暇，研修，家族手当等の多角的側面からどう進めるかを具体的に提案することが私の任務です。」等，意欲的様子が分かった。氏の活動は，実際，1994年7月25日制定法（家族に関する法改正—産育手当の改善，若齢成人のための手当支給，双子等への手当，病人を抱えた家族への休暇の強化など）にも大きな影響を与えたに違いない。

フランスの家族手当制度は常に世界の前衛として発展してきており，社会保障給付費に占める家族手当部門の割合は8.2%（1991年）であり，わが国の10倍の割合となっている。家族手当の内実の大きさのゆえに引き起こされる矛盾も多々顕在化（水準の高い片親手当を受給するために偽装別居をするとか，所得制限が厳しいので家族手当というより低所得救済手当になっていたり等）している中で，家族手当制度の改革は不可避である。今後，財源の移転も含めてさまざまな角度からの再編が進むにちがいないが，こうした改革に先鞭を付けるのがシュルロ氏も所属する「人口と将来協会」や「家族連盟」などの民間組織であることが，常に前向きの提案を持続させる原動力となっているのではないだろうか。

私のフランス社会保障研究は，「19世紀の相互扶助組合」から「20世紀の初頭の家族手当の創設」「戦後の社会保障の確立」「1960年以降の高齢者福祉」「1980年から今日までの家族政策や地方分権化」など広がる一方である。しかし，どこを取り上げても共通する流れがあって興味深い。それは社会制度を形成し，またその社会制度によって変容するフランス人の生活観，社会観の基盤となっている文化観ともいうものであろうか。社会保障の専門家ではないが，鋭い歴史的認識や博物館学芸員顔負けの豊富な知識を持つシュルロ氏との出会いによって広げられた関心と素材をどのような科学的視点に収斂させていくかということが私の目下の課題である。

注）写真は，1993年11月，パリの中世博物館の中庭でシュルロ氏と筆者

（まつむら・さちこ　放送大学教授）